

6.7 甲殻類



(1) 県内の甲殻類の概要

富山県の陸生・陸水生甲殻類の生息状況は特徴的である。すなわち、水生種に関しては富山県の河川は著しい急流で河口近くまで上流的環境が卓越して下流的環境や河口域が発達しないことが多く、汽水湖もなくなっているため、汽水種が極めて少ない。また、山岳地帯を中心に冬季積雪が多く、雪解け水が豊富で水田率が高く、圃場整備が進み、溜池は少ないものの用排水など農業用水利施設も豊富でその整備が進んでいる。したがって淡水生種の生存可能な面積は広いが、河川や用排水では流速が早く、コンクリートの底質が多い。

陸生種に関して甲殻類は比較的乾燥に弱い種が多いため湿潤な環境が必要である。富山県は海岸から3,000mを超す高山山岳地帯まで本県の多様な自然が存在し、また、冬季積雪が多く雪解け水が豊富で年間降水量も2,400mmに達する。しかし、本県でも都市化の進行などで鬱蒼とした森林が少くなりつつあり、ある程度の湿潤さを要求する種の生息は難しくなってきている。また、現在の富山湾の海浜域は干潟が無く、岩礁海岸もきわめて少なく、ほとんどが砂浜か砂利浜である。海岸線は護岸、改修工事が進み、さらに海浜清掃なども含めて海岸生息種の生息場所の減少・喪失が海浜性甲殻類に大きな影響を与えている。

(2) 選定評価の方法

前回リストは、知見が少なかったためカニ類だけに限っていたが、今回は調査者と調査記録が一定増加し、生息環境についての知見が蓄積しているホウネンエビ類、カイエビ類、ワラジムシ目（等脚目）、エビ目（十脚目）を対象とした。

現在の生息状況を従前の知見と比較してその減少、危機の状態・程度を判断したが、絶滅のおそれの度合いに関して定量的な評価を行うための情報が無いため、定性的な判断によってカテゴリーを決定した。その際に、生態的な特性から推測される生息地の減少・衰退や生息環境の変化、近隣県や全国の情報などを参考に評価した。

また、従来の正式記録が全くない種でも減少傾向が明らかと思われる種も加えた。

(3) 選定種の概要

レッドデータブックとやまでは2012年に甲殻類の部門が加えられたが、県内の甲殻類に関する知見が乏しく調査者も少なかったので、検討可能で多くの県内生物研究者の中で減少傾向が一致して認識されていたカニ類2種だけを情報不足として掲載した。

今回は、その後県内の陸生、陸水性甲殻類の調査・研究の知見が一定程度蓄積される一方、減少傾向が著しい種や生息地が極めて狭く生息環境の悪化が懸念される種が見いだされてきたので、屋外でも肉眼で確認可能な概ね体長1mm以上で同定可能なホウネンエビ類、カイエビ類、ワラジムシ目（等脚目）、エビ目（十脚目）にわたる18種をあげた。

評価のランクの内訳は絶滅+野生絶滅0種、絶滅危惧I類2種、絶滅危惧II類1種、準絶滅危惧3種、情報不足12種である。

(4) 絶滅の危機に追い込んでいる要因（減少要因）

富山県は水田率が高く用排水も発達しているが、河川や用排水路の底質がコンクリート等になっていくことが多くなり、砂泥底生息種、止水・緩流に生息する種が激減した。また農薬の使用、水管理の時期の変更も水生種の生息に影響すると思われる。

陸上種は人間営為による森林の減少をはじめ植生や土壤の状況、乾燥化と地球の温暖化がかかわっている。また、海浜種に関して富山県は自然海岸が極めて少なく護岸工事や海浜の整備が行われて人工海岸化し、大規模な海浜清掃も加えて生息場所が減少・喪失している。

(5) 種のリストの整理基準

原則として、和名、学名などはエビ目とホウネンエビ類・カイエビ類は「豊田 幸詞（著）、駒井 智幸（監修）、関 慎太郎（写真）日本産 淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑（緑書房）」を参考とした。ワラジムシ目（等脚目）は「布村昇 2015. ワラジムシ目 in 青木淳一編著 2015. 日本産土壤動物 第二版：分類のための図解検索 東海大出版会」に従った。

(6) 謝辞・協力者

富山市科学博物館と吉岡 翼氏、いみず水辺の愛好会の金子芳治氏と田村正次氏、魚津水族館の稻村 修氏と齋藤真里氏、富山県文化財室、氷見市教育委員会、女良公民館と清水孝則氏、横田 昌氏、そのほか大勢の方にお世話になりました。

（文責：布村 昇）

ベンケイガニ (エビ (十脚) 目・ベンケイガニ科) *Sesarmops intermedius* (De Haan, 1835)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

過去の正確な生息データがあまり残っていないが、県内での生息数が極めて少ない。

形態

甲幅 35mm。甲羅はほぼ四角形で、前側縁に明瞭な 1 歯がある。甲と鉗脚は赤から赤褐色で、よく似ているアカテガニのオスよりも赤色の部分が多い。鉗脚は左右同大で、雄の方がメスよりも大きくなる。鉗脚掌部には顆粒がある。



撮影：木村 知晴

国内の分布状況

本州、四国、九州、南西諸島に分布する。本州の分布域は日本海側では秋田県以南、太平洋側では岩手県以南。

県内の分布状況

かつて富山県内で確認された記録があるが、詳細は不明。近年では、2023～2024 年の調査において氷見市と黒部市で数個体が確認された。

生態・生息環境

河川の下流域の土手や草むら、水田の畔、海岸に面した林などの地面や石の隙間に巣穴を掘って生息する。日中は巣穴の中やその近くにいるが夜間は活発に活動する。雌は卵を腹肢に抱え孵化するまで保護し、夏に河川や海岸に移動し、幼生を水中に放出する。

生存への脅威（減少の要因）

海岸部や河川の開発、水田や用水路の圃場整備などにより、生息環境できる環境が減少している。

保全対策

海岸部や河口部の開発を控える。

文献

参考文献：10)



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

カクベンケイガニ (エビ (十脚) 目・ベンケイガニ科) *Parasesarma pictum* (De Haan, 1835)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧 I 類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内での生息できる環境が極めて少ないと、確認例がわずかである。

形態

甲幅 30mm。甲羅はほぼ四角形で、前側縁に歯はない。甲は黒と緑褐色のまだら模様。鉗脚可動指上部に 10 数個の顆粒が並ぶ。



撮影：木村 知晴

国内の分布状況

日本海側では秋田県以南、太平洋側では千葉県以南から南西諸島に分布する。

県内の分布状況

1950～1960 年代に高岡市、1980～1990 年代に氷見市で少数の記録がある。2023～2024 年の調査でも、高岡市の海岸、氷見市の海岸および虻が島で生息が確認されたが、いずれの場所も個体数は少ない。

生態・生息環境

海岸の岩場や転石の下、石垣やコンクリート壁の隙間などに生息する。日中はあまり表に出てこないが、夜間は活発に活動する。

生存への脅威（減少の要因）

海岸部の開発や護岸工事などにより、生息できる環境が攪乱されている。

保全対策

海岸部や河口部の開発を控える。

文献

参考文献：10), 19), 34)



2012年以降の記録をもとに作成

(文責：木村 知晴)

アカテガニ (エビ (十脚) 目・ベンケイガニ科) *Chiromantes haematocheir* (De Haan, 1833)

富山県 2025 カテゴリー：絶滅危惧II類
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

かつては普通に見られたが、近年、きわめて生息域と生息数が減少し、極めて限定的になった。

形態

甲幅 35mm。甲羅は厚みのある四角形。オス成体は鉗脚が大きく赤色で先端が白い。鉗脚掌部の外面は滑らかで光沢がある。甲は前半部が朱色で後半が緑褐色や茶褐色。メスは鉗脚が小さく、甲の色は全体的に褐色。幼若個体は雌雄ともに鉗脚が小さく全身が淡黄褐色。



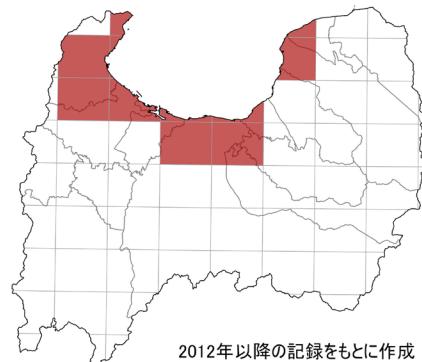
撮影：木村 知晴

国内の分布状況

東アジア（日本、中国、台湾、朝鮮半島など）一円に広く分布し、日本では本州から南西諸島まで。

県内の分布状況

2012年以降、氷見市、高岡市、射水市、富山市、黒部市、入善町で確認された。大河川の下流部や氷見市の海岸部で比較的多く確認されているが、いずれも単発的で生息密度は低い。



2012年以降の記録をもとに作成

生態・生息環境

海岸や河川中流から下流域で、土手、石垣、草むら、水田の畔などに多くみられる。地面や土手、石の隙間に巣穴を掘り、目中は巣穴の中やその近くにいるが夜間は活発に活動する。春から夏に交尾をする。雌は卵を腹肢に抱え孵化するまで保護し、夏の夜間に海や川で幼生を水中に放出する。小ガニに変態してから上陸し陸域で生活する。

生存への脅威（減少の要因）

海浜域や河川下流域の開発などにより生息環境が悪化している。

保全対策

河川の下流部や海岸部の開発を控える。

文献

参考文献：10), 19), 21), 34)

(文責：木村 知晴)

ニホンタマワラジムシ (ワラジムシ (等脚) 目・タマワラジムシ科) *Alloniscus balssi* (Verhoeff, 1928)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

適度の湿気と塩分が存在する海岸の飛沫帯や海岸付近の環境にすむ。特に崖になった砂浜の打ち上げ物の裏面などに多い種で、近隣の県には比較的多く、県内にも本来は広く生息したものと考えられ、1970年代には高岡市国分から氷見市大境等で確認されているが、2010年以降は氷見市柳田海岸の確認のみ。富山湾の海岸は攪乱が著しく、海岸工事や海岸の大規模清掃などにより個体群が顕著に減少した可能性が高い。



撮影：布村 昇

形態

体は平たく楕円形。体長 10mm までで、体幅の 2 倍。生時は灰色、灰褐色、緑褐色。第 2 触角は 3 鞭節からなる。目は 20 個の個眼がある。雄の生殖突起は紡錘形。腹肢には偽気管をもたない。第 1 腹肢内肢先端は真っすぐ、外肢は丸いが先端付近が細い。雄第 2 腹肢内肢は細長く、外肢は三角形。尾肢原節は大きく両肢は細い。腹尾節は丸い。

国内の分布状況

山形県、福島県から鹿児島県にかけて分布。

県内の分布状況

1970年代には高岡市国分から氷見市大境で確認されているが、2010年以降は氷見市柳田海岸のみ。

生態・生息環境

自然の岩礁海岸や適当な形状の転石海岸。適度の大きさの砂利などの飛沫帯の打ち上げの裏側や落葉落枝の裏など、適度な湿り気と塩分などの条件がそろった環境でのみ発見される。

生存への脅威（減少の要因）

海岸や海岸林の大規模な改変を伴う大型工事による乾燥化。落葉落枝や打ち上げ物の完全撤去。

保全対策

自然海岸の大規模な改変を避けること。松林など海浜地帯への不適切な農薬の散布を避けること。

文献

参考文献：12), 22), 31)

(文責：布村 昇)

テナガエビ (エビ (十脚) 目・テナガエビ科) *Macrobrachium nipponense* (De Haan, 1849)

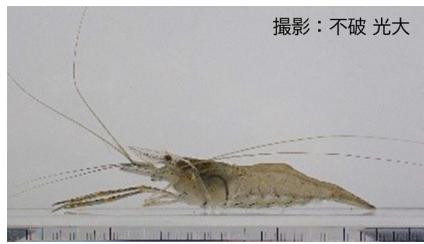
富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

県内の多くの地点で確認されているが、大型の個体は少なく、富山県では食用に利用されるほど捕獲できない。稚エビの遡上に適した河口域が少ない。

形態

体長は 90mm。第 2 胸脚は長く発達し成熟したオスは特に顕著でハサミには剛毛が多い。頭胸甲には不明瞭な斜めの帯が 3 本ある。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

青森県から九州。汽水域から河川中流域、湖沼、汽水湖など幅広く生息する。

県内の分布状況

過去の記録は乏しく高岡古城公園（泉ほか, 1985）、氷見市上庄川（富山県, 2015）仏生寺川（奥野・布村, 2010）、高岡市庄川（荒木ほか, 1998）（村木ほか, 2018）など県西部で報告がある。近年では氷見市、射水市、富山市のほか滑川市、魚津市、黒部市など県東部下流域で確認されている（不破ほか 2021）。

生態・生息環境

河川から流れ降り幼生期を海で過ごす両側回遊型と、産卵・成長を淡水域で過ごす陸封型がある。富山県ではほとんどが両側回遊型で、河口から中流域のヨシなどが生える緩やかなところで見られる。陸封型は湖沼などの止水域に生息するが富山県では稀。肉食傾向が強い雜食性で、魚類、昆虫類、エビ類、ミミズなどを捕食する。

生存への脅威（減少の要因）

河川の護岸化などによる水生植物（抽水植物や沈水植物）の減少。

保全対策

植物が生える緩やかな下流域など稚エビの遡上に適した生息環境が整っていれば、海を介して増加する。

文献

参考文献：1), 3) 8), 11), 33), 35), 37)

(文責：不破 光大)

サワガニ (エビ (十脚) 目・サワガニ科) *Geothelphusa dehaani* (White, 1847)

富山県 2025 カテゴリー：準絶滅危惧
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

かつては県内各地に多数が生息していたが、生息環境の悪化により個体数が減少している。

形態

甲幅 25mm。体色は甲が赤褐色のものが多いが、青色や紫色の個体も稀に見られる。甲羅は滑らかで毛や突起などはない。鉗脚は雄ではどちらか一方が大きく、雌では左右同大の個体が多い。



撮影：木村 知晴

国内の分布状況

青森県から鹿児島県中之島に分布する日本固有種。

県内の分布状況

県内では高山帯と海岸部を除くほぼ全域に生息している。

生態・生息環境

一生を淡水域で過ごす純淡水性のカニ。普通は水質がきれいな溪流、川の上流域から中流域にかけて生息し、富山県では小川や用水でも生息する。夜行性で昼間は石の下などにひそむが、雨天など湿った時には川の近くの森林や路上などでもみられる。春から秋にかけて活動期で、冬は川の近くの岩陰などで冬眠する。

生存への脅威（減少の要因）

河川上流部の河川工事や古い用水路の護岸工事などにより生息域の破壊が懸念される。

保全対策

河川中流・上流部や小河川の大規模な開発を控えること。

文献

参考文献：2), 5), 6) 7), 19), 21), 23), 24), 26), 27), 28), 37)

(文責：木村 知晴)

ホウネンエビ (無甲 (ホウネンエビ) 目・ホウネンエビ科) *Branchinella kugenumaensis* (Crustacea:Anostraca)

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

減反、乾田化とともに生息地の減少。過去の記録が少ない。放流入為分布の可能性がある。

形態

体長は 25mm 尾脚を含めると 30mm。頭部には左右に付き出た黒く円らな複眼がある。仰向けで水面近くを泳ぐ。成熟したオスは緑藻を伴い体色が鮮やかな緑色の場合がある。尾脚は鮮やかな朱色で目立つ。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

本州、四国に分布。近隣県では新潟県、福井県、岐阜県、長野県から知られている。

県内の分布状況

高岡市、射水市の水田で確認されている。出現する水田は限定的で調査は十分ではない。

生態・生息環境

主に水田に生息し、代掻き後に孵化し中干しまでに成長し産卵する。卵は休眠状態で乾燥や低温に耐えることができ、適した環境になるまで待つことができる。主に植物プランクトンを含む水中の懸濁物を捕食している。

生存への脅威（減少の要因）

減反、農地転用、乾田化による生息地の減少。不適切な農薬使用。住宅地に面している水田は今後開発が進む可能性がある。

保全対策

生息分布が不明瞭のため情報の蓄積が望まれる。

文献

参考文献：39), 40)

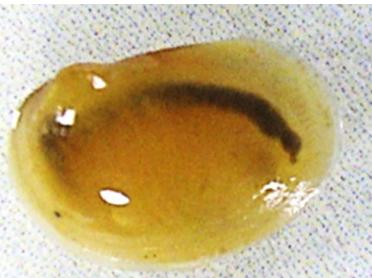
(文責：不破 光大)

カイエビ (双殻目・カイエビ科) *Cyzicus gifuensis* (Ishikawa, 1895)

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

従来の記録がほとんどないが、布村（2006）によると 2004～2005 年ごろ魚津市、黒部市、入善町でおびただしい数が確認されていたのを初め、吉岡（2016）によると 2013 年ごろ黒部川扇状地、下新川郡、富山市など県内各地の水田や水路に普通に生息していたものと考えられる。しかし、現在では県内各地で見られるものの、出現する水田数や生息密度は減少したようである。



撮影：布村 昇

形態

体は 16～20 本の成長線が見える二枚貝状の薄い殻で左右から覆われる。2 枚の殻は褐色で、閉殻筋で接続しており、内部が透けて見える。殻長は約 10mm。1 対の大きい無柄の複眼がある。第 2 触角は頭部側面から伸び、太い腕の先に 2 本の枝を出し、そこに遊泳に使う多数の毛が並んでいる。体節が多く、胸部と鰓脚のない短い腹部に分かれれる。胸部は 30 節でそれぞれに一对の鰓状の付属肢がある。腹部は短く、脚がない。後端に曲がった鉤状の突起があり、尾爪は長い。

国内の分布状況

青森県から兵庫県、徳島県に分布。

県内の分布状況

黒部川扇状地と富山市、射水市、砺波平野西部などから知られている。

生態・生息環境

水田および隣接した用排水路など。

生存への脅威（減少の要因）

転作や圃場放棄、圃場改修等などの水田環境の変化、不適切な農薬の使用。

保全対策

転作、圃場放棄、圃場改修等などの水田環境の変化、不適切な農薬の使用などの脅威を除くことが必要と思われる。一般に有機農法などの環境保全型農業保全が保全に良いと考えられるが、慣行栽培の水田でも生息しているようで未知の要因が多い。

文献

参考文献：16), 19), 37), 38), 40)

(文責：布村 昇)

「ヒメカイエビ属の一種」 (双殻目・ヒメカイエビ科) *Eulimnadia* sp.

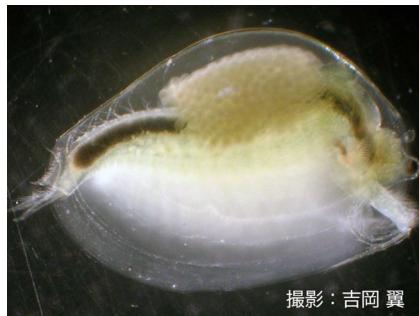
富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

吉岡（2016）が、常願寺川左岸扇央（富山市月岡周辺）、滑川市金屋、黒部市荻生からムスジカイエビ *Eulimnadia packardiana* として報告したが、それ以前の本属について正確な報告はないと思われる。なお、本種は吉岡（2016）がムスジヒメカイエビとして報告したが、この類は分類が安定しないため、報告者と協議し、了承を得てヒメカイエビ属の一種 *Eulimnadia* sp.として報告する。

形態

体は黄白色の背側が弓なりの二枚貝状の薄い殻で覆われ、内部が透けて見える。殻長は約 6mm。3~6 本の成長線がみられる。頭部は比較的小さく肢は 18 対、尾節は爪が長い。分類に混乱がある状態なので、種名を特定しない。



撮影：吉岡 翼

国内の分布状況

新潟県から九州に分布。

県内の分布状況

吉岡（2016）が富山市月岡周辺、滑川市金屋、黒部市荻生からムスジヒメカイエビ *Eulimnadia packardiana* として報告している。

生態・生息環境

水田や水たまりに生息する。

生存への脅威（減少の要因）

未知な要因が多いが、カイエビと同様と考えられ、不適切な農薬の使用、圃場整備。

保全対策

カイエビと同様と考えられる。

文献

参考文献：37), 38), 40)

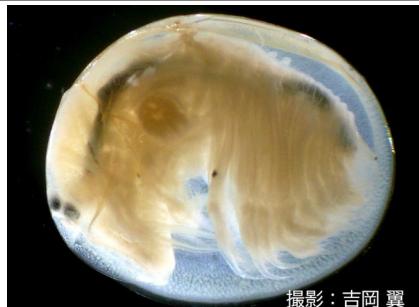
(文責：布村 昇)

タマカイエビ (双殻目・タマカイエビ科) *Lynceus biformis* (Ishikawa, 1895)

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

従来の記録がほとんどないが、県内各地の水田や水路に普通に生息していたものと考えられるが吉岡（2016）が富山市浜黒崎を中心に常願寺川左岸などで報告している。カイエビと同様に一部の水田から確認できる出現状況であり、生息環境は同様であると考えられる。また、10 年余で減少したことがうかがえる。



撮影：吉岡 翼

形態

体は二枚貝状だが、甲は成長線がなく、ほぼ球形に近い。体色は殻が黄褐色～緑褐色の半透明。背中側が丸く弓なりになっている。殻長は約 6~7mm。頭部が比較的大きく吻が発達していて殻から出ている。脚はメス 10~12 対、オスは 10 対、オス第 1 脚肢はカギ型。

国内の分布状況

青森県から兵庫県に分布。

県内の分布状況

富山市や舟橋村など常願寺川付近を中心に高岡市、南砺市の一部から確認されている。出現する水田は限定的だが、調査は十分ではない。

生態・生息環境

もっぱら水田や一時的湿地など。

生存への脅威（減少の要因）

未知な要因が多いが、カイエビと同様と考えられ、不適切な農薬の使用、圃場整備。

保全対策

カイエビと同様と考えられる。

文献

参考文献：37), 38), 40)

(文責：布村 昇)

ハマダンゴムシ (ワラジムシ (等脚) 目・ハマダンゴムシ科) *Tylos granuliferus* Budde-Lund, 1885

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

適度の湿気と塩分が存在する海岸の飛沫帯にすむ。特に砂浜の打ち上げ物の裏面などに多いことがある。県内にも本来は広く生息したと考えられ、1970年代には富山市浜黒崎、日方江、大村海岸、高岡市国分、氷見市島尾から大境で確認されているが、2010年以降は氷見市虹が島の確認のみであり、富山湾の海岸は攪乱が著しくその生息は危ぶまれるが、夜行性が強く、昼間は砂潜っていることが多いので、幅広い調査がされないと正確な生息状況の確認は困難。

形態

体は平たく楕円形。体長25mmまで、体幅の2倍。生時の体色は褐色、黄白色、灰色、緑色、橙色など変化に富んでいる。頭部前縁はギザギザで中央は突出する。第2触角鞭は3節で等長。オス第2腹肢内肢は太さが変わらないが先端は丸い。尾肢は大きく腹肢の一部を覆う。



撮影：布村 昇

国内の分布状況

北海道からボルネオまで西太平洋地域に広く分布している。

県内の分布状況

1970年代には富山市浜黒崎、日方江、大村海岸、高岡市国分、氷見市島尾、大境で確認されているが、近年は氷見市虹が島のみで確認されているのみ。しかし、夜間の調査などを実施すれば他にも確認できる可能性があるかもしれない。

生態・生息環境

細かい砂の海岸、特に打ち上げ海藻や流木などの下の砂に多い。夜行性が顕著で、昼間は砂に潜っている。

生存への脅威（減少の要因）

飛沫帶の大規模な開発。

保全対策

自然海岸の大規模な改変、乾燥化や、海浜地帯への農薬散布を避けること。

文献

参考文献：20), 32)

(文責：布村 昇)

トヤマウミベワラジムシ (ワラジムシ (等脚) 目・ウミベワラジムシ科) *Quelpartoniscus toyamaensis* Nunomura, 2005

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

適度な大きさの砂利や小型転石の自然海岸の飛沫帯下部で、適度の湿気と塩分が存在する場所にのみ生息する。県内の分布も限定されると予想される。富山湾の海岸は攪乱が著しく、大規模な海岸工事が行われており、環境の激変が生存の脅威となる。

形態

体は平たく楕円形。体長6.8mmまで、体幅の2.5倍。生時は薄橙色ないしは肌色。頭部前縁中央に前方に突き出た鋭い突起がある。第2触角は4鞭節からなり長さの比は2:l:lである。目は小さく10個の個眼がある。雄の生殖突起は紡錘形。腹肢には偽気管をもたない。雄の第1腹肢内肢は太く短い。外肢は楕円形で先端がいくぶん飛び出る。雄第2腹肢内肢は細長く、外肢は丸みを帯びた細い三角形。腹尾節は三角形。



撮影：布村 昇

国内の分布状況

富山県内のタイプ産地以外からは知られていない。

県内の分布状況

朝日町宮崎元屋敷海岸（タイプ産地）。

生態・生息環境

適度な大きさの転石や砂利がある転石海岸の飛沫帯の、湿り気と塩分などの条件がそろった環境でのみ発見される。

生存への脅威（減少の要因）

海岸の大規模な改変を伴う大型工事。

保全対策

海岸の大規模な改変、乾燥化、不適切な農薬散布を避けること。

文献

参考文献：15), 17), 29)

(文責：布村 昇)

ニホンハマワラジムシ (ワラジムシ (等脚) 目・シオサイワラジムシ科) *Armadilloniscus japonicus* Nunomura, 1984

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：情報不足
(環境省版海洋生物レッドリスト)

選定理由

自然海岸の飛沫帯で、適度の湿気と塩分が存在し、生息。県内の分布も限定されると予想される。富山湾の海岸は攪乱が著しく環境の激変が懸念される。

形態

体は平たく楕円形。体長 5.5 mm まで、体幅の 1.8 倍。生時は赤紫で平たい。頭部前縁中央に前方に突き出た鋭い突起がある。第 2 触角は 4 鞭節からなる。眼には 6 個の個眼がある。オスの生殖突起は紡錘形。腹肢には偽氣管をもたない。オス第 1 腹肢内肢は太く外に向かう。外肢は内縁が丸みをおびる。オス第 2 腹肢内肢は長く先端が細くなる。外肢は丸みを帯びた三角形。腹尾節後端は丸い。



撮影：布村 昇

国内の分布状況

日本全国の海岸に分布。

県内の分布状況

氷見市蛇が島。

生態・生息環境

海岸の飛沫帯の岩の割れ目、砂利、砂浜の打上海藻の下など適当な湿度と塩分がたえずなくならない環境。

生存への脅威（減少の要因）

飛沫帯の大規模な開発と乾燥化。

保全対策

海浜の大規模な改変や農薬などの化学薬品散布を避けることが必要である。

文献

参考文献：12), 22), 25), 30)

(文責：布村 昇)

ハナビロハマワラジムシ (ワラジムシ (等脚) 目・シオサイワラジムシ科) *Armadilloniscus brevinaseus* Nunomura, 1984

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

富山県内では 2000 年以降朝日町宮崎海岸、朝日町草野海岸から確認されただけであるが、この沿岸は大規模な海岸工事が行われる可能性が高く、県内では他に全く確認されていない。

形態

成体の体長は 4~5 mm 程度で生体時は赤みを帯びていることが多いが、液浸標本では白っぽくなることが多い。同属の他種と違い、頭部先端が平らで頭部先端部分に微密毛がある。第 2 触角柄節の基部から 4 節目は細長い。海岸の礫や転石に堆積した有機物下で確認されているが、形態が類似する同属の別種と共に存することがあるため、分布調査の際には慎重に同定を行う必要がある。



撮影：布村 昇

国内の分布状況

県外：和歌山県、鳥取県、島根県、長崎県（対馬）。

県内の分布状況

朝日町でのみ確認されている。

生態・生息環境

転石の下や打ち上げ海藻の裏側など、適度な湿り気が絶えることない飛沫帯。

生存への脅威（減少の要因）

飛沫帯の大規模な開発と乾燥化。

保全対策

海浜の大規模な改変や農薬などの化学薬品散布を避けることが必要である。

文献

参考文献：12), 22), 30)

(文責：布村 昇)

ニッポンヒロワラジムシ (ワラジムシ (等脚) 目・ウシオワラジムシ科) *Littorophiloscia nipponensis* Nunomura, 1986

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：情報不足
(環境省版海洋生物レッドリスト)

選定理由

県内では富山市浜黒崎や魚津市の海岸での確認例があり、海岸の飛沫帯の特定のゾーンの限られた部位から知られていた。近年は朝日町春日、魚津市青島海岸でのみ確認されている。環境の人為的改変に対して脆弱であり、生息地が消滅するおそれがある。

形態

体長 4.7 mm まで、生時の色彩は赤茶色、朱色。アルコール標本では茶色。第2触角は3鞭節からなる。目は個眼からなる。雄生殖突起は先端に向かって尖る。雄第1腹肢内肢は比較的大きく先が尖る。外肢は丸みを帯びた三角形。雄第2腹肢内肢は細く長い、外肢は丸みを帯びた三角形。



撮影：布村 昇

国内の分布状況

全国各地および韓国。

県内の分布状況

近年の確認は朝日町春日、魚津市青島海岸のみ。

生態・生息環境

自然海岸の飛沫帯のうち、適当な湿り気が保持された環境。岩盤をはじめ、粗い砂や砂利が堆積しているなど、特定の環境条件を満たす場所にのみ生息する。

生存への脅威（減少の要因）

飛沫帯の大規模な開発、乾燥化。

保全対策

海岸の大規模改変や不適切な農薬散布を避け、適当な湿度が恒常に保たれる環境の確保。

文献

参考文献：(13), (20), (22), (25), (32)

(文責：布村 昇)

ミゾレヌマエビ (エビ (十脚) 目・ヌマエビ科) *Caridina leucosticta* Stimpson, 1860

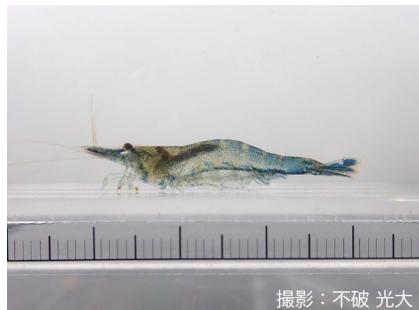
富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

河川整備による生息可能か所の減少。ヌマエビと比較して近年生息地、個体数ともに確認例は増加傾向にあるが、低水温に対する耐寒性が低く（丸山・岡本, 2022）上流的環境の多い富山県の河川では生息環境は限定的と思われる。

形態

体長は 34mm。額角は長く歯は均一に並ばず先端に 1~4 本があり頭部ある。真上から見ると額角に対して眼が斜め前方向きにつく。成熟個体の体色は半透明から褐色、青色など変化に富むが未成熟個体は半透明のものが多く目立たない。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

日本海側では秋田県から南西諸島にかけて分布する。太平洋側は茨城県以南。河川の下流から中流に生息する。

県内の分布状況

氷見市、小矢部市、射水市、高岡市、富山市、滑川市、立山町、上市町、魚津市、黒部市、入善町、朝日町小川までの河口から下流域。緩やかな河川では中流域まで生息する。

生態・生息環境

河口・河川下流から中流域、用水路などに生息する。流れの緩やかな環境を好み、流れのある河川ではヨシなど抽水植物の周辺に多い。両側回遊型で 2~10 月に直径 0.3~0.5mm の卵を 150~5,500 個産む。小卵多産型。

生存への脅威（減少の要因）

護岸化等による生息地の開発。近年確認数が多いが、寒冷地では冬期に減少する場合が多く不安定。

保全対策

植物が生える緩やかな下流域など稚エビの遡上に適した生息環境が整っていれば、海を介して増加する。

文献

参考文献：(9), (37)

(文責：不破 光大)

ヌカエビ (エビ (十脚) 目・ヌマエビ科) *Paratya improvisa* Kemp, 1917

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

河川整備による生息可能箇所の減少。外来種カワリヌマエビ属の一種との競合。ただし、過去の記録にヌマエビとヌカエビの混同があり生息地の実態と増減が不明。

形態

体長は 34mm。眼の上部に 1 対の棘がある。額角の棘は弱く頭胸甲上にはない（稀に 1~2 本）。真上から見たとき、眼は額角に対して垂直につく。体色は半透明、薄茶色、褐色、緑色など変化に富む。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

日本海側は青森県から島根県、太平洋側は青森県から愛知県、滋賀県琵琶湖。日本固有種。

県内の分布状況

滑川市氷見市、小矢部市、高岡市、射水市、富山市、立山町、上市町の河川中流から上流域、ため池などに生息する。魚津市以東で確認されていないが調査が十分でないため生息する可能性はある。

生態・生息環境

低地帯から山地帯の河川中流から上流域、湖沼に生息する。ヨシなどの抽水植物が繁茂する水域を好み、まとまっていることが多い。一生を淡水域で過ごす純淡水型のエビ。中卵中産型で 4~10 月に直径約 0.50~0.75mm の卵を 100~400 個産む。

生存への脅威（減少の要因）

生息地の開発。外来種カワリヌマエビ属の一種との競合。

保全対策

ヌマエビとヌカエビの生息地の精査。生息地の開発は小規模に行う。カワリヌマエビ属の一種の放流を避ける。

文献

参考文献：36), 37)

(文責：不破 光大)

ヌマエビ (エビ (十脚) 目・ヌマエビ科) *Paratya compressa* (De Haan, 1849)

富山県 2025 カテゴリー：情報不足
環境省 2020 カテゴリー：該当なし

選定理由

河川整備による生息可能箇所の減少。外来種カワリヌマエビ属の一種との競合。ただし、過去の記録にヌマエビとヌカエビの混同があり生息地の実態と増減が不明。

形態

体長は 40mm。眼の上部に 1 対の棘がある。額角の棘は甲上 2~4 本ある。真上から見たとき、眼は額角に対して垂直につく。眼球の大きさは眼柄幅に対して約 1.5 倍以上でヌカエビより大きく円ら。体色は半透明、薄茶色、褐色、赤褐色、黄色、白色のミゾレ模様が入るなどヌカエビより鮮やか。



撮影：不破 光大

国内の分布状況

日本海側は新潟県、太平洋側は宮城県以南、四国、九州、南西諸島。

県内の分布状況

氷見市、小矢部市、射水市、高岡市、富山市、上市町、魚津市、黒部市、朝日町までの河口から下流域。中流域まで生息する河川もある。

生態・生息環境

河川下流から中流域に生息する。ヨシなどの抽水植物が繁茂する植物の影を好む。両側回遊型で 4~10 月に直径 0.35~0.45mm の卵を 1,000~5,000 個産む。小卵多産型。

生存への脅威（減少の要因）

生息地の開発。外来種カワリヌマエビ属の一種との競合の可能性がある。

保全対策

植物が生える緩やかな下流域など稚エビの遡上に適した生息環境が整っていれば、海を介して増加する。ヌマエビとヌカエビの生息地の精査。生息地の開発は小規模に行う。カワリヌマエビ属の一種の放流を避ける。

文献

参考文献：36), 37)

(文責：不破 光大)

=参考・引用文献=

- 1) 荒木克昌・日下智敏・南部久男, 1998. 富山県初記録のイチモンジタナゴ. 富山市科学文化センター研究報告, (21) : 129–130.
- 2) 不破光大・稻村 修, 2018. 魚津市別又谷涵養田・自然観察池におけるトンボ類の出現状況(2014~2016年). 魚津水族博物館年報, (27) : 24–28.
- 3) 不破光大・齋藤真里・稻村 修, 2021. 富山県におけるテナガエビの記録. 魚津水族博物館年報, (30) : 43–45.
- 4) グライガー M・J(著), 2011. 日本のカイエビの分布. 生命の湖琵琶湖をさぐる(滋賀県立琵琶湖博物館(編)). pp.90–91. 文一総合出版. 東京.
- 5) 稲村 修・不破光大・伊串祐紀・草間 啓, 2017. 杉沢の沢スギにおける水中生物調査-2014・2015-魚津水族博物館年報, (26) : 19–24.
- 6) 岩田朋文・布村 昇, 2019. 野積川の底生無脊椎動物. 富山の生物, (58) : 12–22.
- 7) 岩田朋文・布村 昇, 2020. 小矢部川(川崎橋以上)の底生無脊椎動物. 富山の生物, (59) : 12–21.
- 8) 泉 治夫・堀井直二郎・邑本順亮, 1985. VIII. 濠の自然.えび類. 高岡古城公園の自然(高岡生物研究会・高岡地学研究会(編)). pp.163–165. 桂書房. 富山.
- 9) 丸山智朗・岡本 研, 2022. 河川水温が両側回遊性コエビ類個体群の越冬に与える影響. CANCER, (31) : 5–18.
- 10) 本尾 洋, 2003. 日本海産カニ類. 既知種. のと海洋ふれあいセンター研究報告, (9) : 55–68.
- 11) 村木誠一・勘坂弘治・田子泰彦, 2018. ウナギとアユの共存漁場の生態・環境特性調査. 平成29年度富山県農林水産総合技術センター水産研究所年報. pp.106–110. 富山県農林水産総合技術センター水産研究所. 滑川.
- 12) Nunomura, N., 1984. Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan, II. Taxonomy of the family Scyphacidae. Bulletin of the Toyama Science Museum, (6) : 1–43.
- 13) Nunomura, N., 1986. Studies on the terrestrial isopod crustaceans in Japan. III. Taxonomy of the families Scyphaciade (continued), Marinoniscidae, Halophilosciidae, Philosciidae and Oniscidae. Bulletin of the Toyama Science Museum, (9) : 1–72.
- 14) 布村 昇, 2003. 昆虫を除く無脊椎動物部門. 庄川流域生態系調査報告書(富山県砺波農林務事務所、富山県水生生物研究会(編)). pp.119–144. 富山県砺波農林務事務所. 砧波.
- 15) Nunomura, N., 2005. A new species of the genus *Quelpartoniscus* (Crustacea : Isopoda : Scyphacidae) from Toyama, central Japan. Bulletin of the Toyama Science Museum, (28) : 13–16.
- 16) 布村 昇, 2006a. 昆虫を除く無脊椎動物(底生動物). 黒部川合口流域調査報告書(富山県魚津農地林務事務所・富山県水生生物研究会・水土里ネット富山(編)). pp.140–188. 富山県魚津農地林務事務所. 魚津.
- 17) 布村 昇, 2006b. 朝日町で発見されたウミベワラジムシの1新種. 富山の生物, (45) : 27–28.
- 18) 布村 昇, 2009. 底生動物部門. 小矢部川流域筑生態系調査報告書(富山県高岡農林振興センター・富山県水生生物研究会・水土里ネット富山(編)). pp.124–169. 富山県高岡農林振興センター. 高岡.
- 19) 布村 昇, 2010. 富山市科学博物館収蔵資料目録第23号「甲殻類I」. 富山市科学博物館. 富山. 94pp.
- 20) 布村 昇, 2011. 富山市科学博物館収蔵資料目録第24号「甲殻類II(等脚目)」. 富山市科学博物館. 133pp.
- 21) 布村 昇, 2013. 仏生寺川の底生無脊椎動物(昆虫を除く). 富山の生物, (52) : 31–34.
- 22) 布村 昇, 2015. ワラジムシ目. 日本産土壤動物 第2版:分類のための図解検索(青木 淳一(著, 編)). pp.997–1065. 東海大学出版会. 秦野.
- 23) 布村 昇, 2022. 宇波川の無脊椎動物(昆虫を除く). 富山の生物, (61) : 14–18.
- 24) 布村 昇, 2023a. 富山市山田川の無脊椎動物(昆虫を除く). 富山の生物, (62) : 14–19.
- 25) 布村 昇, 2023b. ニホンハマワラジムシ・ニッポンヒイロワラジムシ. レッドデータブックとつとり第3版

- 2022—鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物—. pp.174. 鳥取県生活環境部緑豊かな自然課. 鳥取.
- 26) 布村 昇, 2024. 子撫川の無脊椎動物(昆虫を除く). 富山の生物, (63) : 9–14.
- 27) 布村 昇・根来 尚, 2014. 富山市黒川の底生無脊椎動物. 富山の生物, (53) : 25–31.
- 28) 布村 昇・根来 尚, 2015. 山田川(南砺市)の底生無脊椎動物. 富山の生物, (54) : 55–64.
- 29) 布村 昇・下村通誉, 2018a. 日本産等脚目甲殻類の分類(51)ワラジムシ目⑤ウミベワラジムシ科. 海洋と生物 236 Vol.40-No.3. pp.274–277. 生物研究社. 東京.
- 30) 布村 昇・下村通誉, 2018b. 日本産等脚目甲殻類の分類(52)ワラジムシ目⑥シオサイワラジムシ科. 海洋と生物 Vol.40-No.4. pp.386–392. 生物研究社. 東京.
- 31) 布村 昇・下村通誉, 2018c. 本産等脚目甲殻類の分類(53)ワラジムシ目⑦タマワラジムシ科. 海洋と生物 Vol.40-No.5. pp.491–494. 生物研究社. 東京.
- 32) 布村 昇・下村通誉, 2018d. 日本産等脚目甲殻類の分類(54)ワラジムシ目⑧ウシオワラジムシ科、ハマダンゴムシ科、ワラジムシ科. 海洋と生物 Vol.40-No.5. pp.491–494. 生物研究社. 東京.
- 33) 奥野淳兒・布村 昇, 2010. 富山市科学博物館所蔵の富山湾ならびに富山県内陸水産コエビ類(甲殻上綱:エビ(十脚目). 富山市科学博物館研究報告, 33 : 77–87.
- 34) 陸田 健, 1991. 富山湾及び新潟県西部沿岸のカニ類. CANCER, (1) : 17–25.
- 35) 富山県, 2015. 第1章上庄川水系の概要 4 河川環境. 上庄川水系河川整備計画. pp.4 富山県. 富山.
- 36) 豊田幸詞・関慎太郎・駒井智幸(監修), 2014. 日本産淡水性・汽水性甲殻類 102種日本の淡水性エビ・カニ. 株式会社誠文堂新光社. 東京. 255pp.
- 37) 豊田幸詞(文) 関慎太郎(写真) 駒井智幸(監修), 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 緑書房. 東京. 339pp.
- 38) 吉岡 翼, 2014. カイエビ～田んぼのエビから恐竜時代に思いを馳せて～. とやまと自然, 37(1) : 6–8.
- 39) 吉岡 翼, 2015. 富山県におけるホウネンエビの初記録. 富山市科学博物館研究報告, (39) : 91–92.
- 40) 吉岡 翼, 2016. 富山県の水田における大型鰓脚類の分布. 富山市科学博物館研究報告, (40) : 45–49.